

# 日本動物考古学会 第1回大会

プログラム・抄録集



2013年

11/16(土)・17(日)

慶應義塾大学三田キャンパス

# 日本動物考古学会第1回大会

2013年11月16日(土)・17日(日) 慶應義塾大学三田キャンパス

プログラム・抄録集

日本動物考古学会(編)

The 1st Annual Meeting of the Japanese Society for Zooarchaeology

Dates : November 16 and 17, 2013

Venue : Keio University Mita Campus

Program & Abstracts

Edited by the Japanese Society for Zooarchaeology

実行委員長： 佐藤孝雄 (慶應義塾大学)

Chairman of the Executive Committee : Takao Sato (Keio University)

## 目 次

ごあいさつ	1
日本動物考古学会第1回大会によせて	2
大会組織委員会名簿	3
スケジュール	4
大会参加費・懇親会費	4
会場と交通アクセス	5
会場のご案内	6
発表者の方へ	7
抄録集 □演 A	9
□演 B	10
□演 C	12
□演 D	14
ポスター発表	16
「動物考古学」31号 原稿募集に関するお知らせ	22

---

## ごあいさつ

---

日本動物考古学会第1回大会に参加いただき、ありがとうございます。この学会は、動物考古学研究会を引き継ぎ、今年度より新たに組織されたものです。会員の多くは研究会から引き続き参加された会員ですが、新たに参加された方もおられます。

大会の内容についても従来の研究集会と同様に、口頭発表とポスター発表の二つで構成されています。この構成は今後も変わらないと思いますが、発表者の中に会員を必ず含まれていることが必要となりました。また、大会プログラムが事前にホームページに掲載されるなどホームページの充実が図られています。このように、学会となったことで、研究発表の公開性が進みました。あとは発表内容の充実と深化が問われることとなります。

この学会の設立主旨は、動物考古学研究の進展と普及です。大会での発表や学会誌への投稿を通して研究者間での情報交換が進み、研究活動が活発に行われることが期待されています。

この学会はまだ誕生したばかりですので、活動内容には様々な改善が行われるでしょう。会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

日本動物考古学会  
会長 西本豊弘

---

## 日本動物考古学会第1回大会に寄せて

---

このたび日本動物考古学会第1回大会を慶應義塾大学三田キャンパスで開催させていただくこととなりました。学会移行後初となる記念すべき大会のホスト校を務めさせていただきますこと、誠に光栄に存じます。

本学における人類学、考古学、民族学の研究・教育活動の始まりは、1919(大正8)年、「人類学概説」を開講された移川子之蔵博士に遡ります。1942(昭和17)年までは、大山柏博士も「基礎史前学」を講じられました。その後、本学の人類・考古・民族学の研究は、松本信廣博士、清水潤三博士らに引き継がれ、さらにその薫陶を受けられた江坂輝彌先生、小川英雄先生、近森正先生、鈴木公雄先生らのご尽力のもと、1979(昭和54)年には文学部史学科に民族学考古学専攻も開設されるに至りました。以来34年、研究室スタッフの顔ぶれも大きく変わるところとなりましたが、人と自然の絡み合う歴史を読み解くべく多角的かつ領域横断的な研究・教育の実践を重視する学風は、一貫して変わっておりません。

1924(大正13)年の横浜市子安池谷貝塚の発掘を皮切りに、本学は貝塚の調査も数多く手がけて参りました。また、その過程、動物考古学の手法を用いる研究者を輩出してきましたことは、ご承知の通りであります。

そうした伝統をもちます本学で、新たに船出した日本動物考古学会の第1回大会を開催させていただくことは、大きな喜びであります。大会事務局を代表し、参会者の皆様を心より歓迎申し上げますとともに、皆様の活発なるご議論とご懇親により本大会が有意義な学術研究の場となりますよう祈念し、ご挨拶といたします。

日本動物考古学会第1回大会

実行委員長 佐藤孝雄

---

## 大会組織委員会名簿

---

実行委員長	佐藤孝雄	(慶應義塾大学)
実行委員	樋泉岳二	(早稲田大学)
	本郷一美	(総合研究大学院大学)
	新美倫子	(名古屋大学)
	山根洋子	(港区立港郷土資料館)
	植月 学	(山梨県立博物館)
	山崎 健	(奈良文化財研究所)
事務局長	吉永亜紀子	(慶應義塾大学)
事務局員	澤田純明	(聖マリアンナ医科大学)
	小林竜太	(慶應義塾大学大学院)
	澤浦亮平	(東北大学大学院)
	平澤 悠	(慶應義塾大学大学院)
	大西 凜	(慶應義塾大学大学院)
	高橋鵬成	(慶應義塾大学大学院)
	服部太一	(慶應義塾大学文学部)
	富田啓貴	(慶應義塾大学文学部)

---

## スケジュール

---

### ■16日(土)

- 11:00-11:50 役員会会議
- 12:00-12:50 「動物考古学」編集委員会会議
- 13:00-14:00 総会
- 14:15-15:15 研究発表(口演A)
- 15:15-16:00 研究発表(ポスターセッション)
- 16:00-17:20 研究発表(口演B)
- 17:20-17:30 記念撮影
- 17:45-19:45 懇親会

### ■17日(日)

- 9:00-10:00 研究発表(口演C)
- 10:15-11:15 研究発表(口演D)
- 11:30-12:00 学内展示室見学会※

※ 大会終了後、ご希望の向きには、学内にあります民族学・考古学資料の展示室をご覧に入れたく存じます。国内では本学のみが所蔵するニューギニア(ニューアイルランド島)の木製ウリ像も3体展示してありますので、ふるって御参会ください。

---

## 大会参加費・懇親会費

---

大会参加費	1,000円(含む抄録集および茶菓代)
懇親会費	4,000円

## 会場と交通アクセス

### ■ 会場

総会・大会会場	慶應義塾大学三田キャンパス	東館 6 F G-SEC Lab.
懇親会会場	〃	南校舎 4 F ザ・カフェテリア
役員会会場	〃	東館 8 F 小会議室
編集委員会会場	〃	東館 8 F 小会議室
見学会会場	〃	旧図書館 B 1 F 展示室

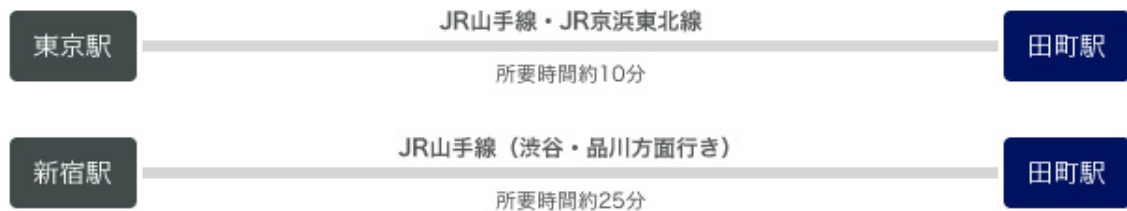
### ■ 交通アクセス

田町駅（JR山手線／JR京浜東北線）徒歩8分

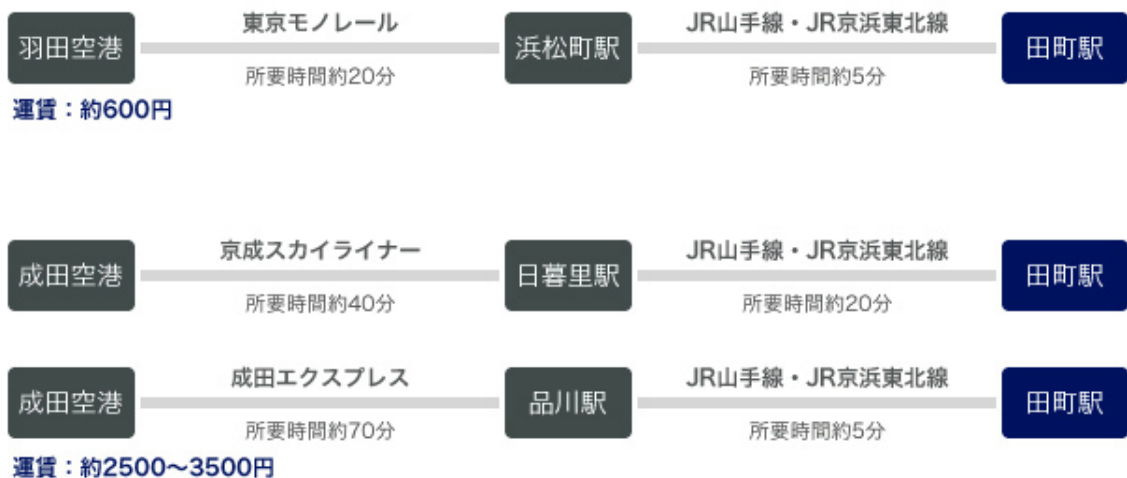
三田駅（都営地下鉄浅草線／都営地下鉄三田線）徒歩7分

赤羽橋駅（都営地下鉄大江戸線）徒歩8分

#### 主要駅からのアクセス

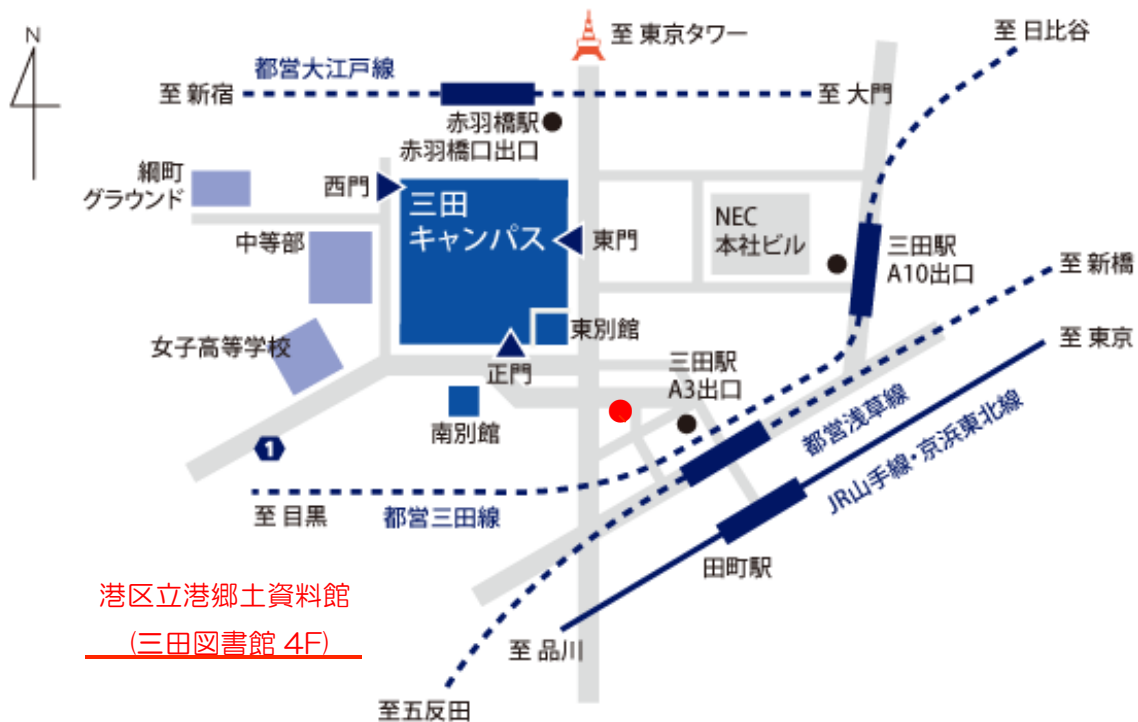


#### 空港からのアクセス





## 会場のご案内



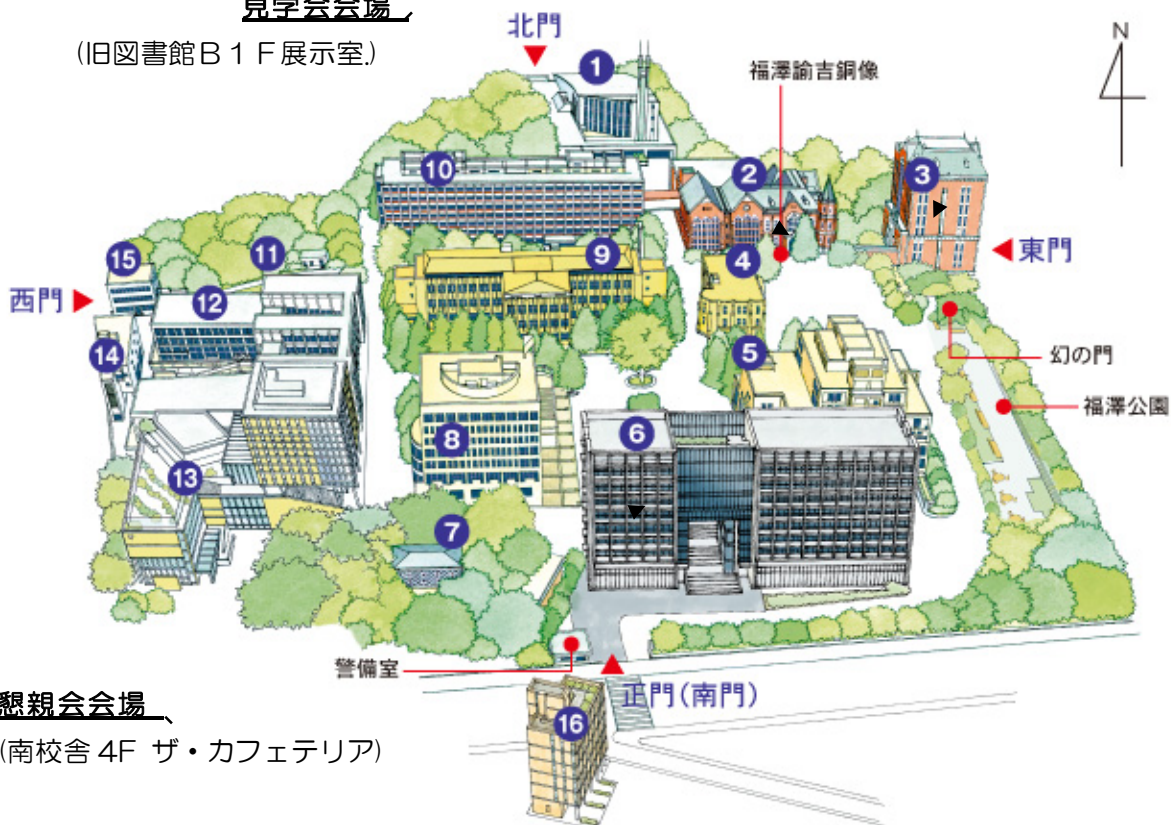
港区立港郷土資料館  
(三田図書館 4F)

### 大会・総会会場

(東館 6F G-SEC Lab.)

### 見学会会場

(旧図書館B 1 F 展示室)



### 懇親会会場

(南校舎 4F ザ・カフェテリア)

## 発表者の方へ

### 1. 口頭発表

#### ■発表の準備

会場には、次発表者席をご用意いたします。発表開始 10 分前までにご着席ください。

#### ■発表時間

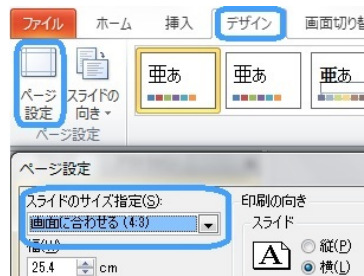
一件当たり 20 分を割当てさせていただいておりますが、内訳は発表時間 15 分、質疑応答 5 分とお考えください。13 分経過（ベル 1 回）、15 分経過（ベル 2 回）、20 分経過（ベル 3 回）をお知らせします。大会を円滑に運営できるよう、時間の厳守にご協力ください。

#### ■データの保存と PC の接続

会場備え付けの PC (OS: Windows7.0) を使用されます方は、事務局員の指示に従い、事前に PPT ファイルを同デスクトップ上に保存していただきますようお願いいたします。ご自身で持参されました PC を使用されます場合は、各自接続してください。

#### ■PowerPoint の画面設定

会場モニターへの画像投影比は「4:3」に設定されております。Microsoft PowerPoint をスクリーンに投影される予定の方は、【デザイン】→【ページ設定】→【スライドのサイズ指定】をご覧の上、【画面に合わせる (4:3)】が選ばれていることをご確認ください（右記画像の青線部）。



この設定になっていない場合（【画面に合わせる (16:9)】など）は、画像の横幅が縮んで表示されたり文字列の配置が崩れたりすることもありますので、ご承知置きください。なお、上記メニュー名はいずれも Office2010・2007 の場合です。

### 2. ポスター発表

ご自身の演題番号が記されておりますボードにポスターを掲示してください。ポスターの掲示と取り外しはご自身でお願いいたします。なお、大会終了後も掲示されたままのポスターにつきましては、処分させていただくことになりますので、ご注意ください。

### 3. 配布資料

配布資料を用意されました方は、会場入口脇のテーブルに置いていただいても結構です。なお、コピーのご要望には一切応じかねますので、ご了承ください。

### 4. 発表抄録

かねてお知らせしてあります通り、ご提出いただきました抄録は『動物考古学』31号にも掲載させていただきます。同抄録と異なる原稿(600字以内)の掲載を希望されます方は、2013年12月28日(土)までにe-mailにてご提出下さい。なお、新たに原稿を提出されます場合も、字数は600字以内に納めてくださいますようお願い申し上げます。

E-mail: [js.zooarch@gmail.com](mailto:js.zooarch@gmail.com)



ニューアイルランド島の木製ウリ像  
(像高: 153cm、慶應義塾大学蔵)

**A1 貝類遺体からみた沖縄のグスク文化成立期**

○黒住耐二（千葉県立中央博物館），新里貴之（鹿児島大），高宮広土（札幌大）

**The Initial Gusuku Cultural Perspectives as Seen from the Analysis of the Molluscan Remains**

Taiji KUROZUMI, Takayuki SHINZATO, Hiroto TAKAMIYA

科学研究費・新学術領域研究によって、漁撈－採集社会の沖縄貝塚時代から穀類農耕社会のグスク時代（中世並行期）への変化を実証的に研究するために、沖縄島糸満市のフェンサ城貝塚で発掘調査を行った。この貝塚時代からグスク時代にかけての連続した遺跡堆積物は少なく、これまで詳細は検討が行えていなかったが、本発掘で、目的を達成できた。その結果、1) 下層の沖縄貝塚時代後2期には貝類遺体が多かったが、上層のグスク時代には貝類遺体はほぼ確認できなくなった、2) 下層の食用貝類遺体ではサンゴ礁のものが優占していた、3) “ダシ型”としたイソハマグリ等の小形食用貝類が多かった、4) 非食用の小形海産貝類ではサンゴ礁ではなく、内湾の種が多く、食用貝類遺体は遠距離のサンゴ礁域で採集されていた、5) 陸産微小貝類では、下層と上層で種組成は大きく変化したものの、生息場所類型（巨視的な植生景観≡植生の人為的変革）には大きな違いが認められなかった、6) 下層には真珠貝の一種が多く、真珠採集の可能性も想定された、こと等が主要な結果である。これらのことから、沖縄のグスク文化成立期には、貝類採集を行わなくなったことが明瞭に示され、“労働時間”の配分が穀類農耕へシフトした可能性が考えられる。陸産微小種の組成変化も、このような生活様式の変化に対応するものと想定される。そして、この変化は、短期間に生じたことも明確になった。

**A2 グスク文化成立期の脊椎動物資源利用**

○樋泉岳二（早稲田大），菅原広史（浦添市教育委員会），黒住耐二（千葉県立中央博物館），新里貴之（鹿児島大），高宮広土（札幌大）

**Vertebrate Resource Use at the Initial Stage of Gusuku Culture in Okinawa**

Takeji TOIZUMI, Hiroshi SUGAWARA, Taiji KUROZUMI, Takayuki SHINZATO, Hiroto TAKAMIYA

沖縄貝塚時代からグスク時代への移行期（10～11 世紀前後）における脊椎動物資源利用の変遷過程に関してはこれまで詳細不明であったが、近年この空白期を埋める資料が得られるようになってきた。沖縄島南部の糸満市フェンサ城貝塚では下層（貝塚時代後2期＝奈良・平安時代平行期）～上層（グスク時代、11?～15 世紀）の連続性の高い堆積層序が確認された。下層ではブダイ科・アイゴ属などのサンゴ礁魚類を主とする大量の魚骨とイノシシが主体であるのに対して、上層では魚骨が激減し、ニシン科・サヨリ科などの小型回遊魚主体に変化する一方、ウシなどの飼育動物が急増する。コラムサンプルの詳細な分析の結果、こうした変化は貝塚時代末期からグスク時代初期（11?～12 世紀）にかけての比較的短い期間内に急速に進行した可能性が強まった。沖縄島北部の名護市屋部前田原貝塚でも、とくに魚骨組成に関して、ベラ・ブダイなどサンゴ礁周辺の魚類を主対象とした貝塚時代の漁労パターンが、グスク時代初期（11～12 世紀）にはアジやミズン類などの小型回遊魚主体の漁に変化しており、グスク時代の初期段階において、すでに貝塚時代の漁労伝統が大きく変質し、新たな漁労形態への転換が明確に進行していたことが確認された。これらの結果はグスク時代における農耕の受容と普及が、脊椎動物資源の利用にも短期間かつ広域的に、きわめて大きな変容をもたらしたことを示唆している。

### A3 北海道浜頓別町日の出貝塚の 2013 年調査

新美倫子（名古屋大），○安津由香里（愛知学院大），鈴木翔太（愛知学院大）

#### **2013 Investigation of the Hinode Shell Mound in Hamatombetsu-cho, Hokkaido**

Michiko NIIMI, Yukari AZU, Shouta SUZUKI

北海道は縄文文化の北限であり、その中でも特に冷涼な北海道北部～東部は遺跡分布密度も低く縄文文化の「境界地域」だったと考えられる。浜頓別町の日の出貝塚は道北部唯一の縄文時代貝塚であり、境界地域の中でも道北部の生活の様相を探ることのできる貴重な遺跡である。日の出貝塚は、かつて 1958 年・1959 年に大場利夫氏らによって発掘されたが、詳しいことは報告されておらず、貝塚の範囲やその形成過程もわかっていなかった。そこで、名古屋大学博物館と浜頓別町教育委員会は日の出貝塚の調査を開始し、2011 年には遺跡の測量を行い、2012 年には大場氏発掘の旧トレンチ（1958 年発掘）を再発掘して貝層の堆積状況を確認した。そして、2013 年には表土を剥がして詳細なボーリング調査を行い、貝層の分布範囲を明らかにした。その結果、貝層は南西-北東方向に長さ 63m×幅 36m と予想よりも広範囲に広がっており、貝層の北側には隣接して盛土遺構が長さ 50m 以上にわたって広がることもわかった。ここではその 2013 年調査の状況について紹介したい。

---

11/16 (土) 16:00~17:20 □演 B

座長：山崎 健（奈文研）

---

### B1 中世大友府内遺跡出土の動物遺存体

○松井章（奈文研），覚張隆史（北里大），丸山真史（奈文研）

#### **Faunal Remains Recovered from Medieval Town of Otomo Funai, Oita City**

Akira MATSUI, Takashi GAKUHARI, Masashi MARUYAMA

大友府内町跡は、大分市東部に立地する中世都市で、今回、その中枢部にあたる万寿寺の北側の堀と、称名寺跡の大規模施設の西側の堀から出土した動物遺存体を報告する。これらは大分県埋蔵文化財センターが発掘したもので、堀の堆積年代は、1570 年から 1582 年の 12 年間のものである。貝類は出土個体数 3 万点余りのうち、キサゴ類が 9 割以上と圧倒的多数を占め、大分湾内で採捕されたと推定でき、アワビ、ハマグリ、アカニシなど商品価値の高い貝類が多く出土する京都、大坂とは異なり、地方都市の性格を示している。魚類は大分川の河口から別府湾に生息するマダイを含むタイ科、ブリ属、ボラ科、ハタ科、スズキ属、ニベ科、インダイ科、フグ科などが主体となるが、外洋種であるマグロ属、ソウダガツオ属、シイラなども出土している。鳥類の特徴は、江田真毅によると出土総数 300 点余りのうち、9 割以上がキジ科で、その多くがサイズの変異の大きいニワトリで、他の遺跡で出土量が多いカモ類は 9 点にとどまる。哺乳類では、形態上の特徴と安定同位体による食性分析の両方から、東南アジアから搬入されたブタの可能性を指摘できた。万寿寺近辺ではニホンジカを主体とし、称名寺跡地の大規模施設ではウシ、ウマが多く、さらに両方の堀から解体痕を持つイヌやネコが多数存在することも明らかになった。本遺跡の動物遺存体によって、この中世城下町の住民が南蛮文化の強い影響のもとで、野性獣から家畜・家禽に至るまで盛んに肉食をしていたことを証明できた。

## B2 中国磁山遺跡出土のニワトリの再検討

○江田真毅（北海道大），菊地大樹（奈文研），袁靖（中国社会科学院考古研究所）

### **Reevaluation of Chicken Bones from Cishan Site, China**

Masaki EDA, Hiroki KIKUCHI, Yuan JING

ニワトリ(*Gallus gallus domesticus*)は東南アジアに分布するセキシヨクヤケイ(*G. gallus*)を原種とする家禽である。新石器時代(約7500年前)に遡る中国河北省武安県磁山遺跡から出土した骨は、世界的にも最古の家禽化されたニワトリの記録とされる。磁山遺跡から出土した骨を分析した周本雄氏は、1)磁山遺跡がセキシヨクヤケイの分布域から遠く離れていること、2)骨の形態はセキシヨクヤケイに類似しているものの、現在の野生セキシヨクヤケイより足根中足骨が大きいこと、3)出土した足根中足骨が距突起のある雄に偏り、屠殺個体の選別が想定できることを根拠に、これらの骨が家禽化されたニワトリのものであると論じた。これまで磁山遺跡から出土したニワトリの骨に対する疑義は何度か投げかけられてきたものの、資料の再検討はなされてこなかった。本研究では、発表者らがこれまでに確立したニワトリの骨の同定基準に基づいて、河北省邯鄲市博物館に収蔵・展示されている磁山遺跡のニワトリ骨を再検討したので、その結果を報告する。

## B3 モンゴル国内遺跡出土馬の体高

○植月学(山梨県博), Tuvshinjargal Tumurbaatar(モンゴル国立博),

Bayarsaikhan Jamsranjav(モンゴル国立博), Erdene Myagmar(モンゴル国立大)

### **Body Size of Excavated Horses in Mongolia**

Manabu UETSUKI, Tuvshinjargal TUMURBAATAR, Bayarsaikhan JAMSRANJAV,

Erdene MYAGMAR

モンゴル国立大学およびモンゴル国立博物館所蔵の遺跡出土馬の計測結果について報告する。対象遺跡は17遺跡で年代は青銅器、匈奴、突厥、ウイグル、中世(モンゴル帝国時代)の各時代にわたる。西中川他(1991)の在来馬、および Eisenmann の現生品種の四肢骨長との比較によれば、四肢のプロポーションは木曾馬やポニーに近い。体高推定には林田・山内(1957)と Eisenmann による現生複数品種の推定式を用いた。各推定式で結果に大差はなく、いずれも130cm前後と推定された。時期別にみると中世が突厥やウイグル期よりも5cm程度大きい、少数の標本による結果であり、時期差と言えるかはさらに検討を要する。匈奴以前については、頭部、頸部、蹄のみを埋納する石堆からの出土で、四肢骨を欠くため体高推定ができない。頭蓋骨および下顎骨の計測値を西中川他(1991)の在来馬の数値と比較すると、青銅器時代、匈奴時代ともに御崎馬と木曾馬の中間の大きさに収まる。頭部の大きさと体高の関係は一概には論じられないが、少なくとも頭部のサイズに大きな時期的変化はなかったと考えられる。遺伝学の成果からはモンゴル馬は日本を含む東アジア在来馬の祖先集団にもっとも近いとされるが、過去においてどのような形態の馬が存在したかは、日本列島に初期に渡来した馬やその後の大陸との交渉を検討する上で重要な情報であり、今後さらに調査を進めていく。

#### B4 3D レーザースキャナーによる動物考古学の新手法

○菊地大樹（奈文研），平澤麻衣子（奈文研），松井章（奈文研）

##### **New Methods of Zooarcheology Using 3D Laser Scanner**

Hiroki KIKUCHI, Maiko HIRASAWA, Akira MATSUI

近年、さまざまな研究分野で 3D レーザースキャナーが用いられている。この技術を動物考古学にも応用し、遺跡から出土することが多い動物種の 3D 骨格図譜を作成した。骨格図譜を 3D にしたことで、骨格標本と同じように、どの角度からも自在にみることができ、各部位の形態イメージをより把握しやすくなった。また、データ形式は、汎用性の高い pdf 形式となっているため、専用のソフトを必要することなく、ノートパソコンやタブレットなどで手軽に利用できることから、骨格図譜を機能的に携帯することも可能となった。そのため、実地調査に赴く際、大型の骨格標本を持ち出すこと、大量の骨格図譜を携帯するなどの負担が改善されることとなる。さらに、遺跡から出土した動物遺存体にたいする研究についても実践的な利用を開始しており、その成果もふくめた動物考古学への応用方法を報告する。

---

11/17(日) 9:00~10:00 □演 C

座長：鶴澤和宏（東亜大）

---

#### C1 青森県尻労安部洞窟の発掘調査成果（2011~2013 年）

○澤浦亮平（東北大），奈良貴史（新潟医療福祉大），渡辺丈彦（奈文研），澤田純明（聖マリ医大），千葉毅（神奈川県博），萩原康雄（新潟医療福祉大），平澤悠（慶應大），金井紋子（慶應大），竹内俊吾（慶應大），佐藤孝雄（慶應大）

##### **Results of the 2011-2013 Excavation at the Shitsukari-Abe Cave, Aomori Prefecture**

Ryohei SAWAURA, Takashi NARA, Takehiko WATANABE, Junmei SAWADA, Tsuyoshi CHIBA, Yasuo HAGIHARA, Yu HIRASAWA, Ayako KANAI, Shungo TAKEUCHI, Takao SATO

慶應義塾大学を中心とする調査団は、後期更新世の石器・動物骨・人骨の発見を目指し、2001 年以来、尻労安部洞窟の発掘調査を継続してきた。2008・2009 年、ナイフ形石器とともに多数のウサギの歯が出土し、旧石器時代の石器と動物遺体の明確な共伴出土例を確認した。2011 年以降、発掘範囲を洞窟奥側に拡張しながら調査を進め、トラピーズ（台形石器）、二次剥離剥片各 1 点と歯牙を主体とする動物遺体を多数発見、洞奥部において動物骨がより良好な保存状態にあることも確認された。カモシカのほかに現在本州には分布しないヒグマ、ヘラジカが新たに出土し、更新世動物群は多彩な種で構成されることが明らかとなった。出土動物群の主体であるウサギは、石器出土地点の周辺に集中的に分布し自然堆積の産状とは顕著に異なっていたが、少数ながら確認され始めた大型獣もウサギ同様、旧石器時代人の獲物に由来するものと解釈し得るのか否か、出土状況の精査や年代学的な検討も加えながら総合的に判断することが今後の調査課題となる。従来、日本列島の旧石器時代像は、河岸段丘上の開地遺跡にみられる石器製作址、絶滅大型動物や人骨が出土した少数遺跡に基づいて形作られてきた。その状況下、石器製作活動の痕跡の希薄さと小型哺乳類の多出に特徴づけられる尻労安部洞窟の調査成果は、旧石器時代研究に新たな展開をもたらすものとなる。

## C2 津雲貝塚出土貝類の再検討

○遠部慎（北海道大学埋蔵文化財調査室），畑山智史（東京大学博物館）

### **The Reexamination of Shell Excavated from Tukumo Shell Midden**

Shin ONBE, Satoshi HATAKEYAMA

岡山県笠岡市に所在する津雲貝塚は、縄文時代を中心とする百体以上の埋葬人骨が確認された遺跡として著名である。また、学史的な検討や、各収蔵機関による資料紹介なども数多く行われている。しかしながら、自然遺物についての記載は少ない。そこで、本研究では、発表者らが再整理を行った、広島県立歴史博物館を中心とする資料および既報告データに基づき、本貝塚の実態把握にむけての予察的な検討を行う。

## C3 貝殻成長線分析を用いた災害史復元の基礎的研究

○畑山智史（東大総合研究博物館）

### **A Basic Study for the Restoration of Historical Disaster Based on Shell Growth Line Analysis**

Satoshi HATAKEYAMA

ハマグリなどの二枚貝の表面には、日周期的に形成される日輪が知られている。考古学では、その生物学的特性を利用することで、遺跡における人類の貝採集季節や遺跡の堆積速度が推定された。成長線は、日輪以外にその貝類が生息していた環境変化においても形成される。特に2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震によって生じた津波に被災したアサリの表面には、明瞭な障害輪が観察できた。このような事例は、過去の災害によっても生じていると予想され、その特性を用いることで、災害史の復元が期待される。災害史復元のため、津波で被災したとされる現生チョウセンハマグリの貝殻微細構造と遺跡出土貝類の障害輪を調査した。チョウセンハマグリの調査では、最低海水温度によって生じた2011年の冬輪(2月15日前後)以降に障害輪が観察できた。同地域のコタマガイにおいても同様の障害輪がみられた。この障害輪は、冬輪からの日輪本数より津波によって生じた痕跡と考えられる。本発表では、現生貝類の切断面にみられる微細構造の観察から得られた特徴をまとめ、貝殻成長線分析を用いた災害史復元の可能性について議論する。



D1 大坂城下町跡における双六の駒の製作

○丸山真史（奈文研），清水和明（大阪文化財研）

**The Piece of Sugoroku Recovered from Osaka Castle Town**

Masashi MARUYAMA, Kazuaki SHIMIZU

大阪市中央区道修町3丁目に位置する大坂城下町跡 OJ11-5 次調査では、17 世紀前葉に位置づけられる土坑 SK06 から大量の動物遺存体が出土した。SK06 は調査区で部分的に調査できただけで、全体の規模は明らかではないが長さ 2m 以上、深さ 0.9m 以上の大規模なゴミ穴である。出土した動物遺存体には、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が含まれており、出土量では哺乳類が他を圧倒する。哺乳類のなかでも、鋸で切断されたウシの脛骨と中足骨が多数を占めており、骨製の双六駒も出土している。これらは牛骨を素材とする双六駒の製作に関連した未成品および廃材と考えられる。本発表では、牛骨を素材とした双六の駒の製作工程の復元を行うとともに、骨に残る加工痕から見た製作技法の特徴、製作規模などについて報告する。

D2 東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査に対する支援の現状報告

○山崎健（奈文研）

**Status Report on Support System of Excavations Related to Reconstruction in the Great East Japan Earthquake**

Takeshi YAMAZAKI

現在、東日本大震災の被災 3 県（岩手県・宮城県・福島県）において、集落の高台移転や道路整備などの復興事業に伴う復興関連の発掘調査が実施されており、その支援をするために埋蔵文化財の専門職員が日本全国から派遣されている。そして、津波による甚大な被害を受けた沿岸部には縄文時代の貝塚が埋没している可能性が高く、やむを得ず発掘調査を実施する場合には、通常の遺跡では残りにくい古人骨、動物遺存体、植物遺存体などの貴重な有機質遺物が多く出土することが想定される。そのため、やむを得ず貝塚を発掘する場合には、迅速かつ効率的な発掘調査をおこなうことが重要な課題となる。そこで奈良文化財研究所では、日本植生史学会（植物遺存体）、日本動物考古学会（動物遺存体）、日本人類学会（古人骨）に協力を要請して、復興関連調査へ専門的技術を有する人材を迅速に現場に派遣する全国的な支援体制を確立しようと活動してきた。各自治体からの依頼は奈良文化財研究所で対応するが、膨大な量の有機質遺物が出土し、迅速な発掘調査が妨げられる場合には、必要に応じて日本植生史学会、日本動物考古学会、日本人類学会などの関連学会にも協力要請をおこない、円滑な復興と埋蔵文化財保護の両立を目指していきたいと考えている。本発表では、今年度上半期におこなった支援活動の現状を報告する。

### D3 アンデス形成期における動物利用

—ペルー北部高地に位置する2つの神殿遺跡から出土した動物相—

○鶴澤和宏（東亜大学人間科学部），関雄二（国立民族学博物館）

#### **Animal Utilization in the Formative Period in the Peruvian Andes: Comparison of Archaeological Bone Assemblages from Two Ceremonial Centers in the Northern Highlands of Peru**

Kazuhiro UZAWA, Yuji SEKI

ペルー北部高地に所在するパコパンパ遺跡で実施している動物考古学調査の結果を報告する。南米アンデスでは、アフロ・ユーラシア大陸の古代文明とは独立して独自の文明発達がみられた。形成期（4,000BC-50AD）と呼ぶ時期には、大型の神殿が建造され、儀礼活動を中心にまとまった社会の組織化が生じたことがわかっている。アンデス形成期を対象とした動物考古学研究には主として3つの課題がある。すなわち、（1）アンデスに発祥するラクダ科家畜の起源と拡散過程の復元、（2）狩猟採集社会から神殿を中心とする農牧複合型社会への変遷過程の解明、（3）動物儀礼の分析を通じた宗教観の推定である。発表者らは2002年以降、10シーズンにわたってペルー北部高地における考古学調査を実施し、当地におけるラクダ家畜の飼育開始年代を明らかにしてきた（Uzawa *et al.* 2008）。今夏の調査で形成期中期から後期に属する動物骨資料が追加されたことにより、遺跡間における動物利用の定量的比較が可能となった。本発表では、アンデス山脈東麓に位置するパコパンパ遺跡と、西麓にあるクントゥルワシ遺跡の動物相を比較し、当該期における動物利用の差について検討し、地域社会が交易を通じネットワークを広げていく過程について論じる。

P1 カサガイ類貝殻成長線分析の基礎的研究

○大塚秀（東海大），照屋清之介（東京大学大学院），畑山智史（東京大学総合研究博物館）

**Basic Research in Shell Growth Line Analysis of Patellogastropods**

Shu OTSUKA, Shinnosuke TERUYA, Satoshi HATAKEYAMA

カサガイ類は、食物残滓以外に、貝輪として縄文時代から古墳時代にかけて出土する。貝輪は、人骨の装着例や青銅・石製の類似品が出土することからも、当時を考える上で重要な遺物であり、様々な視点で貝輪に関する研究がなされ、加工・使用法や産地の推定などの材の採集から流通、消費に関する様相が明らかとされてきた。その論考の中で、適した貝殻サイズに達するまでの年月に関して、10年を要することが推察されている。貝輪に適したサイズまでに長い年月が費やされるならば、無秩序な採集活動では資源の枯渇を招くため、その管理体制や組織など存在が示唆される。だが、この年月に関しては、推察に過ぎず、これまでに理化学的な検証がなされていなかった。我々は、貝輪の適材サイズとその年齢を明らかにするため、材となるカサガイ類の貝殻切断面にみられる微細構造に注目し、その解析をおこなった。本研究では、日本各地でマツバガイ、オオツタノハガイなどの現生カサガイ類を採集し、試料とした。カサガイの成長線分析は、考古学のみならず、生物学においても前例がないため、ハマグリやアサリなどの一般的に貝殻成長線分析で用いられるレプリカ法とマガキなどの葉状構造を持つ貝種に用いられる薄切片法の作成・観察を行い、両方法の比較・検討を主とした基礎研究をおこなった。その結果、カサガイ類では、従来のレプリカ法での観察が不適と判断でき、薄切片法の有効性が認められた。

P2 九州を中心としたクマサルボオ製貝製品について（予察）

○黒住耐二（千葉県立中央博物館）

**Preliminary Observations of Shell Artifact Made on Anadara Glabosa around the Kyushu**

Taiji KUROZUMI

発表者は、佐賀県東名遺跡（縄文早期末）のアカガイ系貝輪（いわゆるフネガイ科貝輪で、サルボオ類 *Scapharca* を利用したもの）を、クイチガイサルボオと同定・報告した。報告書校正時に、この種を高い殻高・角張る後背縁・32本程度の放射肋数から、クマサルボオとも考えたが、最終判断を下せなかった。今回、熊本県轟貝塚の慶応大資料を観察する機会に恵まれた。この貝塚からはクマサルボオが報告され、16点のアカガイ系貝輪が図示されている。実見した未報告資料中には、10点のクマサルボオが存在し、うち7点は未加工であった。図示された製品のうち、4点は後背縁が角張っており、クマサルボオに同定できる。殻の特徴から、この種は熊本県御領貝塚や岡山県彦崎貝塚の貝輪にも用いられていたと判断した。東名遺跡からは、多数の貝輪（片）が出土しているが、未加工の殻や中央部の破片は稀で、粗加工品が持ち込まれていたと考えられる。つまり早期末に少なくとも九州ではクマサルボオの貝輪が流通していたと推測される。クマサルボオの現在の分布域は有明海・瀬戸内西部であるが、韓国釜山の東三洞貝塚でもクマサルボオの可能性のある貝輪が展示されていた。文献によると同地ではクマサルボオは生息しておらず、サトウガイも少ないようで、九州のクマサルボオ貝輪が搬入された可能性も想定される。また計測値から、クマサルボオは、アカガイより厚質なことから、貝輪として選択されたことも考えられる。

### P3 大阪府四條畷市葎屋北遺跡から出土した動物遺存体

○安部みき子（大阪市立大学大学院医学研究科），宮崎泰史（大阪府教育委員会）

#### **Analysis of Animal Remains from Archaeological Site in Shitomiya-Kita Site, Shijounawate City, Osaka Pref.**

Mikiko ABE, Taiji MIYAZAKI

大阪府四條畷市に位置する葎屋北遺跡は弥生時代から近世までの複合遺跡である。平成 13 年から大阪府教育委員会が行った調査で、古墳時代中期から後期(5C~6C)にかけて集落遺構が検出された。これらの遺構に伴い朝鮮半島の影響を受けた土器、輪鏝やひょう轡などの馬具とともに製塩土器などが出土している。一方、動物遺存体は哺乳類 47 科、鳥類 2 科、爬虫類 1 科、両生類 1 目、魚類 2 綱 14 科と棘皮動物のウニの 1 種が出土しており、そのうち家畜種はウマ、ウシとイヌである。特にウマの全身や頭部のみを埋葬や埋納している土坑や遊離骨格が出土している遺構が多数検出されている。

本遺跡のウマは日本で本格的な飼育を始めた頃の遺跡と考えられ、出土しているウマの骨格は朝鮮半島などから移入された当時のウマの体格を反映していると考えられる。一方、供出しているイヌは牧羊犬として飼育されていた可能性があり、弥生時代に渡来している犬種との関係を知る上で重要な資料である。本遺跡は日本書紀などに書かれている「河内の馬飼部」と関係が深いと考えられている。したがって、本遺跡の出土動物を分析することは淀川河川敷や河内潟周辺に点在していたであろう「牧」の生活様式の解明に重要な手掛かりとなる。

### P4 富山県氷見市上久津呂中屋遺跡における動物資源利用

○納屋内高史（富山県教育委員会埋蔵文化財センター），町田賢一（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）

#### **Utilization of Animal Resources Excavated from Kamikuturonakaya Site in Himi City, Toyama Prefecture**

Takashi NAYAUCHI, Kenichi MACHIDA

上久津呂中屋遺跡は、富山県氷見市上久津呂に所在する、縄文時代早期後半～近世にかけての遺跡である。2003 年から 2005 年に行われた発掘調査により、縄文時代早期後半から後期前葉にかけての谷と、縄文時代早期末から中期末にわたる貝塚が検出され、それらの遺構から多量の動物遺存体が出土した。分析の結果、貝類はサルボウ、アサリなどの鹹水種が、魚類は、タイ科やカワハギ科など内湾や沿岸域を好む種とマグロ属など沖合を好む種が主体を占めた。また、海生哺乳類は、沖合を好むマイルカ属が最も多く出土した。陸生哺乳類は、ニホンジカが最も多く、イノシシ、イヌも多い。鳥類は、ウ科が最も多く、アビ属やカモ科も多い。これらのことから、本遺跡における動物資源利用は、遺跡付近に存在した潟湖やその外側の富山湾、周辺の山林などから獲得できる種を網羅的に利用するものであったと言える。また、資料の帰属時期を詳細に限定できる貝塚出土資料についてみると、貝類は、時代が下るにつれて汽水種の比率が減り、ほぼ鹹水種だけで占められるようになる。それ以外の動物遺存体は、組成は時期を通じてあまり変化がないものの、時期が下るにつれて出土量が減少し、特に第 1 貝層から第 2 貝層へ移る段階で、大型資料が激減する。このことから本遺跡の貝塚は、潟湖の鹹水化に伴い、それまでの生業・生活様式が不適応を来し、形成の終焉に至ったと考えられる。

## P5 復興事業に伴う発掘調査で出土した動物遺存体の概要

○松崎哲也（京都大学大学院），丸山真史（奈文研），山崎健（奈文研）

### **The First Report of Faunal Remains from Excavation for Reconstruction Project in Iwate**

Tetsuya MATSUAKI, Masashi MARUYAMA, Takeshi YAMAZAKI

2011年に発生した東日本大震災は、東北地方を中心として甚大な被害を及ぼした。現在、被災地では復興事業に伴う発掘調査がおこなわれており、動物遺存体も出土している。本発表では、復興事業に伴う発掘調査で出土した動物遺存体の事例として、岩手県陸前高田市の堂の前貝塚について概要を報告する。堂の前貝塚は、広田湾東岸の丘陵先端部に所在する縄文時代中期～後期の貝塚である。2012年度、個人住宅の高台移転に伴う発掘調査がおこなわれ、丘陵斜面に大量の土器や石器とともに動物遺存体が数多く出土した。翌2013年度に陸前高田市の業務委託を受け、動物遺存体の分析と報告書執筆をおこなっている。今回の発掘調査では明確な貝層は検出されておらず、動物遺存体の保存状態は必ずしも良好でなく、土壌ごと取り上げられた脆弱な資料が多かった。そのため、まずは骨の状態に応じてエタノールや水を用いてクリーニング作業をおこなうとともに、同定可能な資料を中心に強化処理をおこなった。出土した動物遺存体は同定資料数で約800点、同定された分類群は37分類群に及ぶ。現場採集資料では、哺乳類はシカ・イノシシ主体で、魚類はマグロ属が非常に多く出土した。水洗選別資料ではニシン科やウミタナゴ科が多く認められたほか、非常に小さな釣針も見つかっている。

## P6 北海道東部地域でのカワシンジュガイの利用

○上奈穂美（国立歴史民俗博物館），豊原熙司（第四紀地質研究所）

### **The Ancestral Utilization of Freshwater Pearl Mussels (*Margaritifera leavis*) in Eastern Hokkaido**

Naomi KAMI, Teruji TOYOHARA

カワシンジュガイは、北海道内の遺跡では比較的広く見られる淡水産の2枚貝である。本州での生息地は山間地の溪流に限定されるが、北海道では上流域に限らず、海岸からそれ程離れていない中・下流域でも生息が確認されている。大規模な貝層を形成する類の貝ではないため、漁撈活動に関する研究では重要視されることがなかったものの、遺跡から出土する同種は、アイヌ文化の農耕や神謡、送り儀礼に関する研究を背景に注目されてきた。ヒエやアワ等の穀類の収穫にはこの貝で作られた穂摘み具が使用され、実際、遺跡からもこれと酷似する本種を用いた加工品が出土している。また、本種は、サケ漁の不振を回避するための雨請いに利用される他、人間側の自然に対する礼儀の欠如を飢饉でもって戒める内容の神謡にも度々登場し、送りの対象ともなっている。サケ科魚類との関連も深く、本種の繁殖にはこれらの魚との共存が不可欠であり、神謡と遺跡の双方に本種とサケの組み合わせが見られる点も大変興味深い。本発表では、遺跡内での検討の後に北海道東部地域でのオホーツク文化期以降の時期的な出土傾向を把握し、アイヌによる本種の利用例を参考に、カワシンジュガイの利用の変遷について考察を加えた。

## P7 オホーツク文化期におけるアイスピックとされる骨器について

○猪熊樹人（根室市歴史と自然の資料館）

### **Bone Tools Considered as Ice Picks in the Okhotsk Culture Period**

Shigeto INOKUMA

オホーツク文化期には海獣骨や鳥骨を利用した多種多様な骨器がある。銚先や釣針などは、型式分類や製作技法など研究が深められているが、用途や属性の検討がされていない器種も存在する。ここで紹介する骨器はクジラ骨製であり、銚先の中柄やアイスピックなど様々な用途が想定されてきた。しかしながら、用途を特定するのは困難であるため、ここでは骨器のもつ特徴や分布を中心に検討を行った。発掘資料だけでは点数が少ないため、北海道大学植物園・博物館所蔵の採集資料なども補完資料として調査した。その結果、オホーツク文化期でも刻文期と貼付文期の両方で出土しており、1～4ヶ所の突起を有し、棒状のものとやや幅広のものが存在すること、両端が使用により摩滅していることが特徴として認められた。さらに分布が根室地方から南千島（国後島、色丹島）の遺跡に限られるようであり、オホーツク文化の地域性を考える一要素になりうるということがわかった。

## P8 礼文島における動物資源利用の変遷—浜中2遺跡出土遺体群の検討を中心に—

○高橋鵬成（慶應大）、佐藤孝雄（慶應大）

### **Transition of Faunal Utilization on Rebun Island: with a Special Reference to the Researches of Faunal Remains Unearthed from the Hamanaka 2 Site**

Tomonari TAKAHASHI, Takao SATO

オホーツク文化集団の動物資源利用に関しては、多数の先行研究が存在する。特に礼文島香深井 A 遺跡の出土遺体を分析し、生業カレンダーも復元した西本豊弘(1978)の論考は、今日に至るまで多くの研究者に引用されてきた。またその中で西本は動物遺体に基づく熱量復元から、同文化集団を漁撈民として評価している。周知の通り、サハリン島とも一衣帯水の地にある礼文島には、十和田期から融合期に至るオホーツク文化の各期の遺跡群が確認されている。分析対象とする浜中2遺跡は島の北端、船泊湾奥部に位置し、オホーツク文化の各期の遺物包含層が重層的かつ分厚く堆積しており、香深井 A 遺跡と同等もしくはそれ以上に生業変遷の詳細を把握するに適した遺跡である。発表者らは2011年より同遺跡 Nakatani 地点の発掘調査に参加し、オホーツク文化期全般の動物遺体群を分析する機会を得た。未だ同定作業の途上にあるその全容を示すことこそできないが、既に2011年度コラムサンプルからは、十和田期まで低調であった魚類・貝類・ウニ類の利用が、刻文期以降活発化したことを示す分析結果が得られた。本発表では同分析結果の詳細を示し、それらの漁獲量の変化が如何なる要因によって生じたのかについて考察を試みる。

## P9 礼文島浜中 2 遺跡出土のオホーツク犬骨

○大西凜（慶應大），澤田純明（聖マリ医大），佐藤孝雄（慶應大）

### **Dog Remains of the Okhotsk Culture Unearthed from the Hamanaka 2 Site**

Rin ONISHI, Junmei SAWADA, Takao SATO

オホーツク文化期の遺跡から出土する犬骨に関しては、多くの先行研究が存在する。既に一部の資料については計測と年齢推定が実施され、形態分類も試みられてきた（西本 1981、内山 2000）。しかし、近隣他集団と比較し、その形質を定量的に論じた研究はごく僅かに過ぎない（内山・松村 1997）。また、形態小変異や出土部位頻度、骨に見られる古病理学的痕跡、解体・加工痕なども詳細に観察・把握した上で、オホーツク文化集団におけるイヌの飼育環境や利用法を総合的に論じた研究もほとんど見受けられない。北海道の北西約 60km に位置する礼文島には、最小個体数にして 330 体分という多数のオホーツク犬骨が出土した香深井 A 遺跡が存在する。また、島北部の船泊湾砂丘上に位置する浜中 2 遺跡からも保存状態の良い犬骨が大量に出土している。そこで、発表者らはこれら礼文島のオホーツク犬骨群について多角的かつ総合的な調査・研究に着手した。手始めに 2011 年度浜中 2 遺跡 Nakatani 地点から出土した 82 個体分の犬骨群を調査・分析した結果、確認するに至った事柄は以下に示す通りとなる。(1)浜中 2 遺跡から出土したイヌ頭骨は、茂原 (1986) による既報の縄文犬骨群よりも有意に大きく、鈴谷犬骨群よりも小さい計測値を示した。(2)一部の個体群には歯牙にエナメル質減形成や歯周病の痕跡がみられた。

## P10 礼文島浜中 2 遺跡のカラフトブタ遺体

○服部太一（慶應大），澤田純明（聖マリ医大），佐藤孝雄（慶應大）

### **Pig Remains of the Okhotsk Culture Unearthed from the Hamanaka 2 Site**

Taichi HATTORI, Junmei SAWADA, Takao SATO

オホーツク文化集団がブタを飼育・利用していたことはつとに知られている。しかも、遺体の出土量の違いから、同家畜種への依存度には、地域的・時期的相違も存在したらしい。一般に“カラフトブタ”と呼ばれるそれらの形態的特徴については、命名者たる直良信夫(1937)を筆頭に、金子浩昌(1973)、西本豊弘(1976)らによっても論じられてきた。また、aDNA による同種の系統地理解析も石黒直隆ら(2001)によって試みられている。しかしながら、近隣地域のイノシシ・ブタ集団との比較も含め、その形質的特徴はなお十分に把握されているとは言い難く、ブタの飼育・利用法に関する実証的な解明も進んでいない。幸にも演者らは 2011 年以降、礼文島浜中 2 遺跡 Nakatani 地点の発掘調査に携わるなか、保存状態の極めて良い“カラフトブタ”遺体群を分析する機会に恵まれた。そこで、それらについて出土部位、年齢・死亡時期構成を精査した上で、形態を定量的に検討、あわせて古病理学的な痕跡やストレスマーカー、解体・加工痕なども観察した。その結果、以下の点を確認するに至った。(1)下顎第2後臼歯のプロポーシオンは、既報の北東ユーラシア産および弥生時代以降の本州産イノシシ類集団に近似し、本州産縄文イノシシ集団とは大きく異なる。(2)複数の個体に、飼育・利用法を知る手がかりとなる歯槽膿漏、エナメル質減形成、異常咬耗が認められる。

P11 鯨歯細工・工芸の現状について—大阪のある製作所の事例を中心に—

○内田昌宏（富士市立富士第一小学校）

**The Study Value of the Use of Whale's Teeth-The Case Study of a Factory in Osaka-**

Masahiro UCHIDA

日本では、古い時代から鯨を食用だけでなく、油や薬品、生活用品、工芸品などに利用してきた。だが、石油化学製の代用品の登場や捕鯨をめぐる国際情勢の不安定化、ライフスタイルの変化などを背景にして、その存在価値が薄らいできている。鯨歯工芸の場合もその加工技術の伝承が危ぶまれている。論者は、昨年の動物考古学研究集会で、鯨髭を原材料にした靴べら製作の工程や現状などを紹介した。今回の発表では、前回は調査対象にした、長年にわたり鯨工芸品を製作してきた大阪のある製作所の鯨歯工芸製作の一端を紹介し、その工芸品の精巧さや生産の現状、今後の課題などを明らかにしていきたい。



---

## 「動物考古学」31号 原稿募集に関するお知らせ

---

『動物考古学』が装い新たに刊行されます。版面もA4になり、より見やすくなります。学会移行後初めての記念となる号ですので、会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

■ 刊行予定 2014年3月末

■ 締め切り：2013年11月末

■ 募集原稿種目

論文：未発表の新しい資料・知見をまとめたもので結論の明確なもの、または特定の主題について研究史・これまでの研究成果・展望などを総覧したもの

研究ノート：論文に準ずるもので、研究の中間報告や速報性を要するもの

調査報告：考古学、民俗・民族学、生物学などの調査の成果報告

資料紹介：重要資料の紹介

雑録：書評、関連学会の報告や紹介、国際情勢の動向など

※詳しくは投稿規定をご覧ください。

日本動物考古学会編集委員会

植月 学、江田真毅、小野林太郎、小島秀彰、  
建石 徹、津村宏臣、丸山真史

### お問い合わせ、原稿送付先

日本動物考古学会事務局  
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45  
慶應義塾大学 文学部 佐藤孝雄研究室  
TEL・FAX：03-5427-1425  
E-mail：js.zoarch@gmail.com

